

ヨーロッパ第5波・&・芸術活動

(1)パリの終戦記念日

11月11日はフランス第一次世界大戦終戦記念日である。1914年から18年の大戦で200万の兵士を失ったフランスはヨーロッパ諸国の中でも圧倒的な犠牲を払っている。併せて、大戦と重なり猛威を震った「スペイン風邪」によるフランスの死者は24万人を超え、成人男子の数が激減し深刻な人口減少にまで至った第一次世界大戦は遠い歴史ではなく、その傷跡は今もなお全国に残っている。

例年終戦記念の式典がパリ凱旋門で行われる。10年前からは第一次大戦だけに限らず祖国のために戦死した兵士に捧げる式典になっている。

今年は第二次世界大戦最後の生存者ユベール・ジェルマン(1920-2021)の式典が大きく報道された。ドゴール指揮下で参戦した最後の証人だった。(ユベール・ジェルマンについては編者が後記に追加しました)

ユベール・ジェルマン生前の希望を叶え、焼け落ちたパリ・ノートルダム大聖堂の樑の屋根組みから「ロレーヌ十字」が彫られました。「ロレーヌ十字」は第二次世界大戦レジスタンスを象徴し、パリ近郊シュレーヌにある「モン・ヴァレリアンの丘」で多くのレジスタンスが射殺されたため、戦後記念館が建てられ、ジェルマン氏を含む16名が眠っています。



(2)第5波に入る

この軍事式典を前に、昨年3月

「我々は戦時下に入った」とテレビ演説をしたマクロン大統領が再びテレビ演説を行い、ヨーロッパはCOVID-19第5波を迎えたと発表した。

集団ワクチン接種で一旦は新規感染者数が大きく下がり、救急医療を必要とするCOVID重症者数が減ったヨーロッパだが、冬が訪れ寒さが厳しくなるにつれ、確実に第5波が近づいてきた。一日の新規感染者数がポーランド14000、ウクライナ21000、ドイツ27000、イギリス33000とウイルスは依然として流行している。フランスは現時点では新規感染者数7600、病院のベッド数にもまだ余裕はあるがこれから年末年始の集まり、寒波に備える必要がある。マクロン大統領は「65歳以上の高齢者に対して3回目のワクチン接種」の必要性を発表した。2回目の接種日から6ヶ月(免疫力が低下し始める時期)と5週間(猶予期間)を期限に3回目の接種をしないと「衛生パス」が失効する。「衛生パス」がなければ事実上日常生活が送れないフランスである。12月に入れば50歳から64歳の第3次集団接種キャンペーンが始まる。ワクチン接種義務に反対する動きは依然としてあるが、COVIDとの共生はまだまだ続くことに変わりないようだ。

(3)混迷するエネルギー問題

マクロン大統領はコロナ禍対策だけでなく、来年5月の大統領選挙を見据えた政治政策にも言及した。年金改正法、失業保険の条件の他、今後フランスは再び原子力発電所を造ると述べた。コロナ禍を経験して、国外に依存せず自国でエネルギーを確保すること、地球温暖化、排ガス規制を踏まえたエネルギー源として原子力を放棄しない方針である。現時点では具体的なことは何も決まっておらず、現大統領の将来への方向提示ではある。いつ、どこに、どのような原子炉を建設するのか、これから検討が始まる。10年前の東日本大震災時の福島原発事故の教訓を忘れないで欲しいと思う。

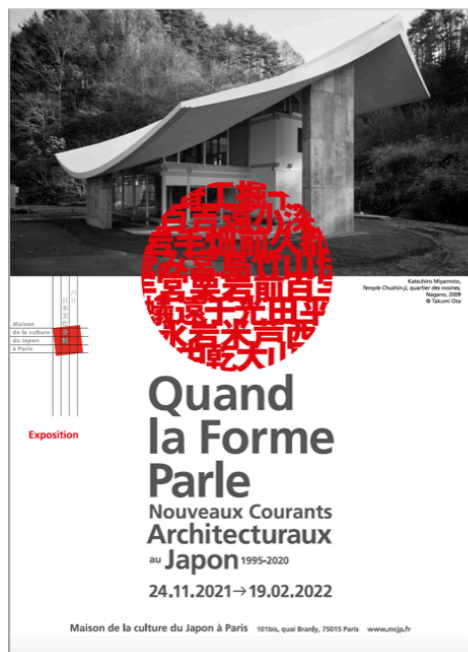
(4)安藤忠雄氏の活躍・ピノー・コレクション館

日本でもフランスでもコロナ禍でさまざまな文化活動が中止、延期を強いられてきた。

「かたちが語るとき ポストバブルの日本建築

家たち(1995-2020)」展もその一つだ。ア
ジール・フロタン「ルイーズ・カトリーヌ
号」の所有者となった一般社団法人「日本建
築設計学会」(ADAN)主催による展覧会で、
今日の日本建築を牽引する1960年以降に生ま
れた建築家35人(組)を紹介する。昨年2020年
10月16日から2021年3月7日までオルレアン
のFRAC Centre(現代アートのための地方美術
館)で開催、11月24日から2022年2月19日ま

展覧会チラシです。



で
パ

リ日本文化会館 (Maison de la Culture du Japon à Paris, 101 bis, quai Branly, 75015 Paris)で行われる。フランス巡回が終わり来年春以降には日本でも開催される予定である。ルーブル美術館ランス別館、メッス・ポンピドゥーセンター別館を始め、フランスにおける日本人建築家の活躍は評価が高い。この5月には、19世紀に建てられたパリ証券取引所を安藤忠雄氏がパリ・ピノー・コレクション館として改造した。天井のドームから自然光が入り、開放的で素晴らしい空間になっている。

日本建築の新たな潮流を代表する35人の作品は新しい建築視野を示している。期間中パリにおられる方には見ていただきたい展覧会である。

(古賀順子記)

あとがき



以下はベストピアの編者の学習資料です

- 1, ユベール・ジェルマン・101歳召天
- 2, フランソワ・アンリ・ピノー (1962～)の夢と安藤忠雄の活躍

1, ユベール・ジェルマン・101歳召天

第2次世界大戦の仏レジスタンス（抵抗運動）戦闘員で、シャルル・ドゴール元大統領からその功績をたたえられ勲章を授与された人物のうち唯一存命していたユベール・ジェルマン氏が亡くなった。101歳。

1940年、ナチス・ドイツに占領されたフランスは、ドゴール氏(自由フランス軍を指揮していた)に触発されたレジスタンスによって4年後に解放された。ジェルマン氏の死により、仏レジスタンスをめぐる歴史は厳粛な節目を迎えた。

エマニュエル・マクロン大統領はエリゼ宮（、大統領府）を通じ出したコメントで、ジェルマン氏を「自由フランスの象徴」と呼び、「その人生に敬服する」と追悼した。

ジェルマン氏は、元レジスタンス指導者のドゴール氏から英雄的行為をたたえられ、リベラシオン勲章を授与された1038人のうちの一人。自由フランス軍とフランス外国人部隊の一員として、リビアのビルハケイムやエジプトのエルアラメイン、チュニジアでの重要な戦いに参加した。2021/10/13(c)AFP

2, フランソワ・アンリ・ピノー (1962～)の夢と安藤忠雄の活躍

グッチ、サンローラン、バレンシアガなどを抱える世界的ラグジュアリーグループ「ケリング」の創業者であるピノーは、半世紀に渡って、1万点以上の現代アートを集めてきたが、パリで自らのコレクションを披露する美術館を開くことを夢見ていた。

〈ブルス・ドゥ・コメルス〉と言う名の円い建物が、パリの中心、レアール近くにある。18世紀には穀物取引場、1889年のパリ万博の際にガラスのドームが加えられ美しい姿に再構築されて、19世紀末からは商品取引所となっていたが、21世紀になって、デジタル化で役目を終えていた。

そんな歴史的建造物がパリ市長からフランソワ・ピノーにオファーされたのは、2015年のことだ。ピノーがヴェネチアにつくった美術館「プンタ・デラ・ドガーナ」に続き、パリの改装も安藤忠雄に依頼した。当時、体調に懸念のあった安藤の負担を減らそうと、在パリの建築事務所NeM、歴史的建造物の修繕を専門とする遺産建築家らもチームに参加。2017年に着工後、地上4階建の内部に10の展示室（1～3階）、多目的ホールやスタジオ（地下1階）、カフェレストラン（4階）などを約3年かけて完成させた。

「アートと関係することで得られるもののひとつは、それによって視点が開かれることにある」——実業家として成功しながら、可能な限りの時間をアートコレクターとしてアーティストと交流し、作品と向かい合うと言うピノー。50年のあいだに集めた作品は現在、1万点にもおよぶ。開幕展では、閉鎖や不動の時代にこそすべての人に向かって開く美術館のあり方を再考し、「自由への渴望」「不当への抵抗」「他者の受容」あるいは「死生観」などへの示唆に富むアーティスト32名の作品約200点を選定した。